



今回は、形原町にある「形原城跡」をご紹介します。

春日浦からブルーブリッジを通って南下すると、終点の信号右前方に、こんもりとした丘が見えてきます。これが形原城跡です。城には古城稲荷神社があり、連続した朱塗りの鳥居が建てられています。

形原城跡は、松平信光（松平宗家の3代目）の四男与副（ともすけ）が、明応年間（1492～1500）に築城したと伝わっています。現在は周辺の埋め立てが進みましたが、昔の絵図によると、丘全体が海に突き出た岬のようになっています。平成13年に、丘陵の一部で宅地造成の計画が持ち上がったことから、発掘調査が行われました。

調査の結果、柱を支える礎石が

軍神を招く？ 石積み遺構

確認され、その配列から建物が存在していたことがわかりました。中でも、中心に据えられていた礎石は特に大きく、直径80センチほどの丸形です。この礎石の下を掘って調べると、高さ約120センチの石積み遺構が見つかりました。

石積みは、20～30センチの石がやぐら状に積み重ねられ、その内側には砂利を含んだ土が突き固められています。また、石積みの中には、青灰色の粘土が約4メートル四方に薄く敷かれていました。

このような石積み遺構が中世城郭の礎石の下から発見されることは、全国的に見ても大変珍しく、発見当時、大変話題になりました。城郭の専門家からは「この石積みには軍神（戦いの神）を招く儀式が行われたのではないか」との意見も出されています。しかし、現在でも似た例は見つからず、未だにその謎は解けていません。



謎?の石積み遺構

皆さんはこの石積み、何に使ったと思いますか？

実物の化石をぜひ間近でご覧ください。現在は調査のため、頭の骨の一部を外して展示しています。



ニュースになったクジラ

科学館の1階には、大きさ9メートルほどのクジラ化石が展示されています。1999年の開館以来展示されている科学館を代表する標本の一つです。ペルー共和国でおよそ800万年前の地層から発見されました。「レプリカですか？」と聞かれることもしばしばですが、全骨格がほぼ完全に揃っている大変見事な実物の化石です。

クジラの仲間には、歯のあるハクジラ類と、歯の代わりに「くじらひげ」という器官でエサをとるヒゲクジラ類の二つのグループに分かれます。科学館のクジラ化石は、口の中にくじらひげの痕跡があり、ヒゲクジラの仲間だとわかります。

さてこのヒゲクジラ化石、今年6月、国立科学博物館により公開調査が行われました。新種のヒゲクジラである可能性が高く、その種類を確定するためです。新聞やテレビでも大きく報道されました。調査終了後、「話題のクジラ化石」として熱心に見学する人が増えました。「どこが違うのですか？」とよく聞かれますが、「ここにでっぱりがあります」と示せるような目立った特徴があるわけではありません。骨の各部位を計測、撮影し、他のクジラとの比較により、種類を特定していきます。頭の骨だけ

で240ほどの調べる部位があり、緻密な作業の積み重ねにより、個々のクジラが持つ特徴がわかってきます。今回の調査のポイントは「耳の骨」を取り出したことです。そのため、頭の骨をいったん外すと、耳の骨とクジラの種類決定とどのような関係があるのか？それは次回お話しします。